引っ張り込まれてコンニチハ。

みん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
引っ張り込まれてコンニチハ。

【Ｎコード】
Ｎ６６４６Ｙ

【作者名】
みん

【あらすじ】
…――――家に帰ったら、魔法を使う怪しい金髪ヤサ男がいたんです。
そんな信じてもらえない度マックスな経験をした十六歳（♂）が、異世界の魔法学校で色々とやらかすハナシ。
※女子が出てきますが、ＢＬ小説。
※残酷描写が入るかも知れません。

【Ｐｒｏｌｏｇｕｅ】オレ、実は疲労マックス？

皆さん、どうも初めまして。大谷聖と申します。
読みはオオタニヒジリです。

さて皆さん。唐突ですが、「自分疲れてるんだなあ…」って思うコトありません？
カップ麺にお湯じゃなくて水を注いじゃったり、眼鏡を掛けたまんま顔を洗おうとして「何で顔に手がくっつかないんだ？」とか思ったり。
それって、自分が気を抜いた瞬間に溜まった疲れが顔を出すんだと思うんですよ。
疲れって気づかないまま蓄積されていくんですね。

…そして今、オレはまさにその状況を味わってるワケですよ。

買い物から帰って来て部屋のドアを開けたら、何故か金髪のにこやかな優男が目に入ったんです。
自分の部屋なのに「間違えました」とドアを閉めて、早三十分。
アレが実体のある不審者なのか、それとも自分の疲れが見せる幻覚なのか。
どっちにしろヤバいと思うんです。

…この状況、どう打破したらいいですか？

【Ｐｒｏｌｏｇｕｅ】オレ、実は疲労マックス？（後書き）

「自分疲れてるんだなあ…」の例は、全て私が複数回やらかした事です。
カップ麺の時は泣きそうになりました。
読んでくださった皆様、ありがとうございます。
休息は大事ですよ…。

【第一話】話せばわかるって言うけど、話したってわかんない事もある。（前書

主人公くんテンパりまくるの巻。

【第一話】話せばわかるって言うけど、話したってわかんない事もある。

「…はああ。じゃあもう一度説明するね？　五度目だけど…」
「じゃあオレももう何回言った分かんねえけど言う。帰れ」

目の前の金髪翠眼の美形は、呆れた様に溜息を吐いた。
その服装は俗に言うローブみたいなヤツで…アレだ、イギリスの某魔法魔術学校の制服みたいな。
つかすごいな、美形は憂い顔すら美形だ…って違う。おかしいだろ。何でオレは不審者に溜息を吐かれてるんだ？
立場逆じゃねーか普通。溜息吐く間もなく通報モンじゃねーか普通。

あの後、「ちょっと、ここ開けてよ」とか声が聞こえてきたのでドアを開けることにした。どうやら幻覚じゃなかったらしい。通報するか交番の場所教えて追い出すか、何らかの処置を取ろうと思っていたんだ。

でもコイツは

「うわー、異世界とか来たの初めてなんだけど」

なんてトンデモ発言をして、そのまま自分の世界の事をレクチャーし始めた。

そして最初のやり取りに至る。

「だから、俺はこの世界とは別の…」
「いや、もういいから。理解できないんじゃなくて理解したくな

いんだってコトを理解してくれ」

こいつ曰く、この世界は「外界（がいかい）」と呼ばれていて、これとは別に二つの世界が存在するらしい。
一つは「魔界（まかい）」。読んで字のごとく魔法の存在する世界。
二つ目は「狭界（さかい）」。外界と魔界の間に存在していて、魔界とは割と自由に行き来できる。

んで、その狭界にはでっかい魔法の学校がある。
こいつはそこで世界を渡る呪文とやらを見つけて、試してみたらここに繋がったらしい。
…なんて説明を受けた。
言ってる事はわかるんだ。きっぱり明快に説明してくれるし、言葉の選び方も上手い。
ただ、そんなぶっ飛んだ発言を理解したくないっていうオレの心境も理解してくれると嬉しい。

「…うん。あのな、お前の言ってる事はわかるんだよ。だから帰ってくれ」
「ごめん、『だから』の使い方おかしくない？」
「どこがだ？　お前の世界の説明は理解したぞ。だからほら、その押入れから帰ってくれ」

オレの布団が押し込められていたはずの押入れの向こうには、風にそよぐ草花が見えている。
今朝までは普通の押入れだったのに、いつから異世界トンネルに変わったんだ。

「うーん、俺の言葉がきっちり理解できてるんなら魔力があるんだよ、キミ。

魔力の無い人間が聞くと、訳の分からない外国語に聞こえるらしいから」
「もう既に外国語聞いてる気分だよ！　頼むから帰ってくださいお願いします」
「あっはは、無理。何か興味湧いたし」

――――…キミに、ね。

そう微笑むコイツの顔が、何だか無性に怖かった。

【第一話】話せばわかるって言うけど、話したってわかんない事もある。（後書

あ、ヤバい相手の名前だしてない。
読んでくださった皆様、本当に感謝しております！

【第二話】渡るか、渡らないか。

「ねえ行こうよー。あっちの学校楽しいよ？」
「いや、いいって。どうかその楽しい場所にお戻りください、お一人で」
「やだよ、君に興味が湧いたのに君無しで帰るなんて」

何でオレ今度は勧誘されてんだろう。
ねえお願いホント帰って。

「もうホント無理。やってける気がしない」
「だーいじょーぶだって！　どうにかなるから」
「その安請け合いはどっから来るんだ！？」

何かこいつ軽い！　見た目はどこの王子だってカンジなのにめっちゃくちゃ軽い！
興味が丸っきり無いって言ったらウソだけど、こいつに着いてったら酷い目に遭いそうな気がする。

「ひっどいなー。本当に大丈夫だってば」
「何オマエ、心も読めんの」
「顔で丸わかりだよ。こいつに着いてったら後悔するにきまってる！　みたいな目ェしてる」
「大正解だ。わかったらさあ帰れ。オレの常識は今日で木端微塵にされたんだ、その木端まで吹き飛ばそうとしないでくれ」
「ガード固いなー。この魔法これといって代償無いし、いつでも帰って来れるよ？
ご家族には上手くハナシつけるからさあ」

「…いないよ」

金髪の目が、軽く見開かれた。

「父さんも母さんも姉ちゃんも、五年前に事故で死んだ」

向こうの世界に少し興味が湧いたのは、キツイからだ。
親戚とは嫌い合ってはないけど、金の問題やらで折り合いが悪いから一緒になんて住めない。だからこの家に住むしかない。
ガキの頃から意地張って一人で暮らしてたけど、例え親戚の家に身を寄せたって、居心地は悪かった気がする。
いつもは平気でも、家族の思い出が詰まったこの家は、時々妙に虚しさを感じさせる。
書斎を見ると、本好きだった父さんを思い出して、いつも淹れていたコーヒーの匂いがしないか無意識に探してしまう。
キッチンから「おかえり！」と母さんの声がしないか、美味しそうな料理の匂いがしないかと期待してしまう。
姉ちゃんが部屋からひょっこり出て来て、「よっしゃ聖、ゲームしようぜ！」とオレを誘ってくれないかと願ってしまう。
いい加減立ち直んないとマズイってのは分かるけど、五年たってもできないままだ。
全く違う場所に行ったら、少しは視野を広くできると思った。
家族以外のよりどころを見つけたかった。

「…そっか」

金髪が、小さな声で言った。謝られないのが心地良かった。

「…行きたくないって訳じゃないんだ。でも、親戚の人達は、何だかんだ言ってオレがいなくなれば心配して探す。

オレそんなに友達多くないけど、きっとそいつらも。
迷惑かけんの嫌だからさ。
周りの人からオレの記憶消してくれるってんなら、大喜びで着いて行くけど」

できないだろ？　と笑うと、金髪は少し躊躇ってから首を横に振った。

「…できるよ。ただしキミにも対価を貰うし、間違ってもおすすめはできないけどね」

一も二も無く「頼む」と頷いた。

「本当にいいの？」
「失われた記憶の復元は不可能だよ」
「記憶を消さなくても世界は渡れるけど」

それら全てに頷いた。
親戚の人達には良くしてもらった。父さん達の死を、あの人達もまだ引きずっている。
そんな中でオレの心配なんて、もうしなくていい。休んでほしい。
高校の友達も、ホントに良くしてくれた。
こんな、全部捨ててどっか行っちまう様なヤツのために、心配したり泣いたりすんのなんてもったいない。
いくらアイツらが泣き上戸だっていっても。

退かないオレに、ついに金髪が折れた。

「…じゃあ、今から始めるよ。何か書くものをくれないか？」

【第二話】渡るか、渡らないか。（後書き）

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

【第三話】さよならマイワールド。ハロー、あたらしいせかい。

オレの部屋の床に、どんどんと油性ペンで線が描かれていく。
丸、楕円、三角形。それらをつなぐ細やかな言葉の綴り。
最初にできた小さな陣を、更に大きな陣が囲むように金髪は手を動かす。
オレは、勉強机の上から一枚だけ写真を抜き取り、ポケットに入れた。

「この陣の中に入って。そうしないと君からも記憶が飛んでしまうから」

金髪の言う通りに小さい陣の中に入り、描かれたばかりのそれをそっと指でなぞった。
何故か文字が自然に読めて、オレは小さく口ずさんでいた。

「読めるの？」
「うん。…ウタカタ、あさぎり、女神フーヤの名において…」
「凄いな」

俺は読めなかった、と金髪は言った。魔法の学校に入るまで読めなかったと。
やがて金髪が最後の線を描き終えると、完成した陣が淡く光った。
貰うね、と前髪が一本引き抜かれ、オレの隣に立った金髪が何かを唱え始める。
目を伏せて指で宙に字を綴り、祈る様に。
囁くよりも小さなその声を聞いていると、やがて空気が震えるのを感じた。

空気の震えと一緒に、足元の陣が強く光り始める。
突然がくんと身体の力が抜けて倒れそうになるのを、金髪が支えてくれた。
　空気の震えと陣の輝きが最高潮になる。
その瞬間に金髪が、光の中にオレの髪を投げ込んだ。
何かが爆発したんじゃないかってくらいの眩しさに、オレは目をきつく閉じた。

○○○○○

「大丈夫？　はい、水」
「何とか……サンキュ。これ、こんなに疲れるモンなのか」
「他人の記憶から君の一部を消去…吸収してしまう訳だからね」
「オレに関する記憶は、全てオレのエネルギーに換算されるってこと？」
「その通り」

いつの間にか陣の消えた部屋で、オレはぐったり床に懐いていた。
てか不思議だな。覚えさせるのに何かエネルギーを使ったワケでもないのにその記憶はエネルギー扱い。まあ終わった事だからいいけど。

眩暈が治まったので、机の上の自分の教科書を裏返してみた。
名前は、無い。
ケータイも初期設定に戻って、高校や中学の生徒手帳も何も書き込まれていない状態。
アルバムの写真も、父さんと母さんと姉ちゃんだけになっていた。

金髪が、どことなく寂しそうに笑った。

「…これで君は、『誰にも知られていない人間』になったよ」
「うん、これでオッケー。オレ、次は心機一転するつもりだからさ」

これでいい。
おじさんもおばさんも、父さん達の死とだけ向き合ってくれればいい。
五年も引きずったままなのは、きっとオレが残ってたからだ。でも、そのオレももういない。
ダチも、すぱっとオレの事なんか忘れて楽しくしてくれてればいい。

にしし、と笑ってオレは立ち上がった。

「よっしゃ、行こーぜ。もうバッチリ回復したから」
「はいはい。一応俺が先に行くね」
「わかった。……ってそうだ、オレ訊きたいコトあんだけど」

何？　と押入れの手前で振り返った金髪に、これまで訊けなかった、一番初歩的な質問をした。

「オレ、大谷聖。オオタニが苗字でヒジリが名前。お前は？」

一瞬驚きの表情を浮かべた金髪は、翠（みどり）の目を細めて破顔した。

「……ユリス、だよ」

そう言うと金髪――――――ユリスは先に押入れの向こうに消えた。
その後をそろそろ続こうとするオレの腕を、温かい手がしっかりと掴んだ。

引っ張られ、うぎゃっと奇声を上げながら柔らかい草の上に転がり出る。

逆光でも美形なユリスの顔を見上げながら、オレは声を出して笑った。

【第三話】さよならマイワールド。ハロー、あたらしいせかい。（後書き）

次は長そうです。
読んでくださった皆様、本当にありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6646y/

引っ張り込まれてコンニチハ。

2011年11月20日23時32分発行